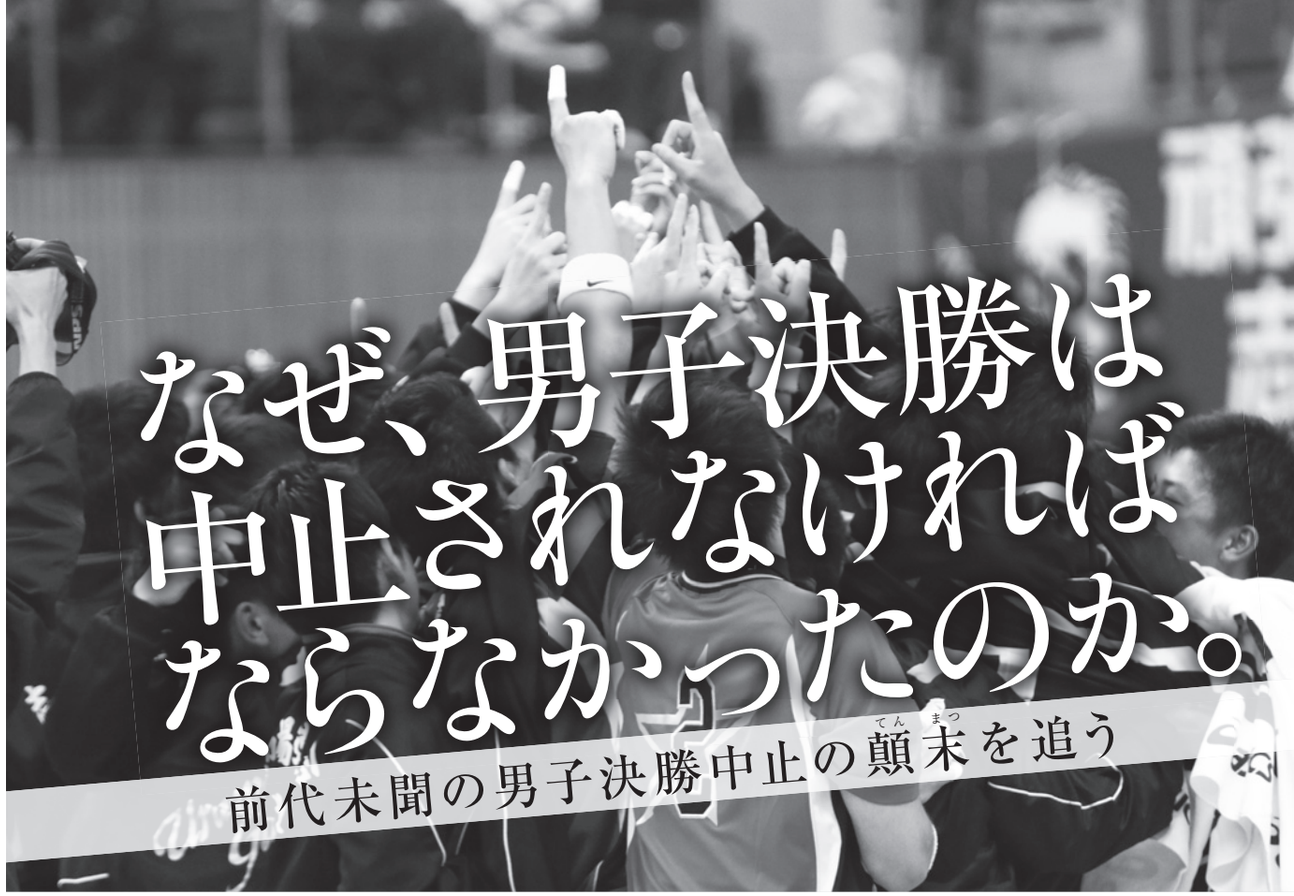

なぜ、男子決勝は中止されなければならなかったのか。

前代未聞の男子決勝中止の顛末（てんまつ）を追う

第38回高校センバツにおいて、大会最終日の3月30日、男子決勝の北陸（福井）－浦和学院（埼玉）戦が、ハーフタイムの時点で中止されるという前代未聞の事態が発生した。戸惑う選手、スタッフ、チーム関係者、そして観客。その裏でなにがあったのか。なぜ、男子決勝は中止されなければならなかったのか。

この始まりは、2日前にさかのぼる。男子4回戦の浦添（沖縄）－法政二（神奈川）戦は後半残り1秒で浦添が劇的な逆転弾を決め、34－33で勝利。準決勝へと駒を進めた。

しかし、じつは、この試合の①前半8分に、浦添の選手が放ったサイドシュートがラインクロス（着地）でノーゴールと判定されていたにもかかわらず、浦添の4点目として記録されていた。

法政二の阿部直人監督は、試合中に「浦添に1点多く入っているのでは?」と感じていた。ハーフタイムにはベンチと反対側でスコアをつけていたスコアラーからもその指摘を受け、チームに戦術的な指示を与えたあと、ハーフタイムが残り2～3分というところで、この試合でテクニカルデレゲート（TD）を務めていた阿部富夫、沖土居真子両氏のもとへ。

阿部監督はTDに「浦添に1点多く入っていませんか」と確認を求めたが、相手チームのこととあって、どのタイミングの、どの選手の得点かということまでは、そこではっきりと示すことができなかった。

そのため、②前半終了時にレフェリーと得点の確認を終えていた阿部TDの「③われわれは、すべての得点において、審判の合図を確認して記録している」という強い口調の前に、これ以上抗議すれば段階罰を受けるのでは、という思いもあって、釈然としないままベンチへと引き上げた。

後半が始まった時点で19－12と法政二が大きくリードしていたが、浦添の猛攻を受け、冒頭のとおり法政二は1点差で逆転負けを喫した。

試合後、法政二の関係者が撮影していたビデオで該当箇所を確認した阿部監督は、そのビデオのデータを自身のPCに入れ、異議申し立てのため、大会本部へ。

対応したのは、この試合のTDで、大会競技委員長でもあった阿部氏だ。阿部TDは「④この時点で試合は終了し、成立していた。だから、本部まで来て『確認してほしい』と（阿部監督が）言っているものを確認するのは問題ないと考えた」と振り返る。

そうして映像を見たところ、ラインクロスが確認できたため、阿部TDはこの場でミスを認めた一方、しかし試合は浦添の勝利で成立している、と阿部監督に告げた。

この対応に納得できない阿部監督は、阿部TDも含め、集まってきていた船木浩久全国高等学校体育連盟ハンドボール専門部（以下、高体連。⑤大会主管）委員長（大会総務委員長）らに「しかるべき対応をお願いします」と告げ、その場を退出。

その後、協議に入った船木委員長、阿部TD、越石信次高体連部長（大会副委員長）ら大会運営役員は、後半開始時の得点が19対12として確定していることなどから、試合は成立していると決定し、大会運営の面からも再試合は困難であると判断。代わって以下の対応を行なうとした。

1：当該校におわび文および事情説明をする
2：防止策を文章として出す
3：各都道府県に報告する

◆Point 1

スコアシートに記録するタイミングは?

スコア誤認、誤記の原因となるのが、スコアシートに記入する得点のあった時間の扱いが徹底されていないこと。

スコアラーは試合を見つめ、シュートがゴールに飛び込むと、すぐに時計を確認して、その時間をスコアシートに書き込むもの、と理解している人が少なくないが、これは間違い。

スコアシートに記入する得点時間は、失点した側がボールをコート中央に運び、レフェリーがスローオフの笛を吹いた時間、というのが正しい。

このため、後半残り3秒の時点でシュートがゴールに入り、そのままタイムアップとなった場合は、スコアシートに記入される得点時間は『29：57』ではなく『30：00』となる。

◆Point 2

TD、レフェリーの役割は?

かつてはオフィシャルだけでなく、レフェリーにも試合の得点を管理する義務があったが、ルールの変更、試合のテンポアップを背景に、現在はレフェリーに得点を管理する義務は課せられていない。

攻守の切り替えが速く、あっと言う間に得点が入る現在、得点が正しく得点盤に反映されているか、また、今回のように得点でないものが得点とされていることに、レフェリーが瞬時に気づいたり、ハーフタイム、あるいは、試合終了後に、スコアシート上の得点を指摘することは極めて難しい。

得点の管理はオフィシャル席のTD（テクニカルデレゲート）に委ねられている。

◆Point 3

スコアチェック体制に不備はなかった?

試合のスコアは、TDが管理し、TDとスコアラーがハーフタイム、そして、試合後に確認し、最後にレフェリーとTDがシートにサインをして試合成立となる。Point 2のようにレフェリーがスコアシートの正否を検証することは難しく、得点の管理はTDとスコアラーに委ねられることになり、試合途中、両者が誤認したまま進行すると、さかのぼっての確認は難しい。

日本リーグではパソコン画面に入力する電算スコアラーとその補助者（スコアを手書き）、手書きのスコアラー、そして派遣されたJHLオフィシャル（手書き）と4枚のスコアが存在し、その4枚をJHLの派遣委員がハーフタイム、試合終了後に照合している。

◆Point 4

試合後に監督はサインをしている?

かつては試合後、両監督がスコアシートを確認してシートにサインをしていた。

その名残りから、今回の4回戦も法政二・阿部監督はスコアシートにサインをしているので、試合成立を認めていると考える人もいたが、現在、両監督がスコアシートにサインをするのは試合前。あくまでベンチに入る役員、選手が間違いなくスコアシートに記入されている、ということだけを確認するためのサインに過ぎない。

そのため、現状では記入されたスコアシートに不備があることがわかっても、試合後、監督はサインを拒んで抗議することはできず、異議を申し立てるルールも存在しなかった。

4：機関誌および『スポーツイベント・ハンドボール』（弊誌）におわび文を掲載してもらう

さらに、⑥この旨を船木委員長が、大会主催の日本ハンドボール協会（JHA）・江成元伸競技本部長（大会委員）と藤井俊朗審判委員長に夕刻、報告した。

翌29日、阿部監督が大会本部へ。ここで前述の対応をとることを大会本部が阿部監督に伝え、もう1校の当該校である浦添・高良大輔監督にも準決勝前に経緯を説明。その後、大会本部で裁定委員会を開催し、阿部大会競技委員長を更迭した。

また、同日、JHAの川上憲太専務理事（大会委員長）は船木委員長から「30日に法政二におわびに行きたいがよいか」と確認を受け、その対応を了承した。

この間、当然ながら試合は進み、勝ち上がった浦添は準決勝で北陸（福井）と対戦。勝利した北陸が翌日の決勝戦で浦和学院（埼玉）と優勝を争うことになった。

そして、決勝戦当日の30日。東京から大会会場に向かうJHAの渡邊佳英会長（大会会長）に、川上専務理事が電話で今回の経緯を説明した。

すると、ここまでの対応に渡邊会長が「世界大会でも、明らかなミスが判明すれば結果が覆ることもある。それが厳正公平なルール、フェアプレーの精神に基づいたスポーツの世界だ。試合が成立したからといって、明らかに間違っているものを押し通すのは許されるものではない。これが運営側の問題というのであれば、その時点のスコアに戻してやり直させるのが当然」として、「⑦男子決勝を中止し、当該試合を33－33として延長から再試合」とすることを指示。川上専務理事は、この決定を東京から電話で船木委員長に伝えた。

この指示が女子決勝の途中だったため、まだ時間はあったが、主管側には「なぜ、この段階になって、中止までしなければならないのか」という部分が伝わり切らず、現場は男子決勝を行ない、渡邊会長が到着次第、説明、説得を行なうこととして男子決勝を予定どおりスタートさせた。

しかし、男子決勝の前半途中に到着した渡邊会長は、試合が行なわれていることに驚き、船木委員長らの説得には応じず、川上専務理事から主管側に再度中止の指示があった。結局、ハーフタイムに入り、越石部長が館内放送により、試合の中断をアナウンスした。

男子決勝はこのまま終了とし、閉会式（表彰式）を女子のみで実施。越石部長が説明を求める一部の保護者、観客に事情を説明したあと、14時20分ごろに1度目の記者会見が開かれた。越石部長と村木啓作愛知県協会副会長（大会副委員長）が出席したこの会見では、経緯の説明と、⑧浦添－法政二を延長戦から再開し、その勝者と北陸が準決勝をやり直す、と発表された。

その後、該当チームへの確認などが行なわれたあと、約2時間後に開かれた2回目の会見で、

・浦添、法政二両校の選手のコンディションやモチベーション、日程の問題などもあり、延長戦は行なわない

・北陸、浦和学院に関しても同様という発表があった。

順位については

・北陸、浦和学院を両校優勝（これについては、大会本部側の議論に結論が出ず、時間が過ぎていく中で浦和学院・岩本明監督が大会本部に提案し、北陸・福村正巳監督も同意）とする

・浦添、四日市工（三重）に加え、法政二の3チームを3位とすることが合わせて発表された。

同日、高体連は執行委員会を開催し、

・越石信次部長、阿部富夫競技委員長（高体連）を更迭する。

・報告書提出：日本ハンドボール協会、全国高等学校体育連盟

・関係各位への事情説明文送付：該当高校所属長宛、都道府県ハンドボール協会、都道府県高体連ハンドボール専門部、大会参加校

・おわび文を掲載：日本協会機関誌、『スポーツイベント・ハンドボール』（弊誌、72ページ参照）

・表彰は該当校に赴き、実施する方向で連絡をとる

ことを決めた。

結局、初動の遅さ、柔軟性を欠く対応、高体連と日本協会の連携不足が、日を追うごとに大会本部から取り得る選択肢を奪っていく形になった。

◆Point 5

主催？　主管？

大会の開催責任者（団体）で、イベント（大会）の中心となるのが主催。大会の運営責任者（団体）で、大会運営の中心となって切り盛りするのが主管となる。

今回のケースで、総責任は主催者（日本ハンドボール協会）にあり、主管者（全国高体連ハンドボール専門部と愛知県協会など地元各団体）はその指示によって動く、という関係にある。男子決勝戦が、日本協会の指示で中止となったのも、この関係による。

なお、全国高校選抜大会は、1978年の第1回大会（愛知）から、日本協会が主催、全国高体連ハンドボール専門部が主管、という体制で開催、運営されている。

◆Point 6

日本協会と高体連の関係は？

Point 5にも関連するが、今大会の主管、全国高体連ハンドボール専門部は、全日本社会人ハンドボール連盟、全日本学生ハンドボール連盟、日本中体連ハンドボール競技部、全国高専ハンドボール連盟、日本車いすハンドボール連盟と並び、今大会の主催、日本ハンドボール協会の加盟団体の1つ、という位置づけになる。

今回、全国高体連ハンドボール専門部としては日本協会の指示を遮（さえぎ）って男子決勝を“強行”する選択肢もあったが、その際は上記のような両者の関係から、日本協会を脱退する、もしくは日本協会から除名されることも辞さない、というくらいの、強い覚悟が求められたことになる。

男子決勝ハーフタイムに試合中止のアナウンスをする越石部長

◆Point 7

主催は大会によって変わる？

センバツは日本協会が学業に支障のない範囲（例えば開催時期）で主催する「高校の全国大会」。1969年に文部省（当時）の諮問機関「保健体育審議会」が学校体育の名で青少年（高校生世代）のスポーツ活動を規制していた文部次官通達を改正、社会体育振興への扉を開けた。これで夏のインターハイとは別に各競技団体が主催する高校大会が生まれ、ハンドボールも続いた。

夏のインターハイは、全国高体連が主催する学校教育活動の一環に組み込んで開く全国大会（ハンドボールなど多くは全日本高校選手権）。1948年6月に結成された全国高体連（現在は公益財団法人）が、内部機構の専門部が開く「全国高校選手権」をインターハイスクール＝インターハイと呼ぶ。1963年から競技別で開いていた各大会を同時期に同じ開催地（現在は原則としてブロック）で開き「全国高校総合体育大会＝高校総体」と呼ぶようになる。

◆Point 8

試合やり直しなんてあるの？

他競技でもプレーのジャッジをめぐり、とくに「誤審」でしばしば混乱があるが、今回のように主管者のミスで競技が不成立、とされたケースは極めて珍しい。

世界のハンドボールでは、国際ハンドボール連盟（IHF）やヨーロッパ球界が『再試合』を組むケースが見られるが、それは体育館事情（ハンドボール専用体育館がある）や長距離バス移動が日常化していることが大きい。

また、多くの大会は総当たり戦（しかも長期の日程）で行なわれ、日程的に再試合をはめ込みやすい、という背景もある。勝ち抜き戦を一堂集結で行なうケースが圧倒的の日本とは、事情が大きく異なっている。

決勝中止後、収まりがつかない保護者らに対し、越石部長が説明を行なった。

なぜ、男子決勝は中止されなければならなかったのか

提言 再発防止に必要なのは明確な基準作りとその徹底

68～71ページでは、なぜ男子決勝が中止という事態になったのか、事実関係を追った。

ここからは今回の件に関して、日本協会が「やり直し」を決定した背景、その後の日本協会の対応をリポートし、現在の制度の不備はどこにあるのか、再発防止への提言を行なっていきたい。

まず、日本協会は、試合が成立したからといって、プレー上のレフェリーのジャッジの是非を問うようなものではなく、明らかな運営側のミスがあり、さらに主管がそれを認めていながらそのまま押し通してしまうことは、国際的に見てありえないという判断のもとに浦添－法政二戦の延長からのやり直しを決めた。

例えば、28日の時点で、予定試合数を終えたあとに延長戦だけを行なう、または29日に時間をずらして、準決勝の前に延長戦を行なう、などの手段が考えられた。しかし、主催（日本協会）と主管（高体連）の責任者が別々の場所におり、意思の疎通がなかなか図れなかったことが大きな問題を引き起こした。

今回の事態を踏まえた日本協会の通達

こうした流れを踏まえ、日本協会は4月1日付けで「競技運営に関する確認」を通達。

これによって、「従来、競技運営中不適切な処置が起きた場合は、そこまでの競技結果（得点、罰則等）は成立させ、明らかになった時点から適切な処置を行った上で競技を再開するという処置を再確認する」とした。

平成26年度版の「テクニカルデレゲート（TD）の任務」には、「12突発的事項の対処方法」で

12－2　IHFの規定では、混乱によって試合当日に試合が続行できないと判断された場合は、観客の有無にかかわらず、翌日（別の日）に同スコア、同じ残り時間、中断時の状況から開始しなければならないとしている。日本協会も、原則としてこの方法で対応する。

12－3　大会、各試合の続行に関して特別な判断が求められる場合は、大会委員長、競技委員長および日本協会代表者が協議し、決定する。

とあったが、「突発的事項」、「混乱」、「原則として」といった言葉の解釈や、各種大会の事情（日程、会場確保）などもあり、今回のような後手を踏む対応を招いた。

そのため、「テクニカルデレゲートの任務」平成27年度版（4月1日付け）で、TDは「事実判定を除いた異議申立てについては、真摯に対応し、適切に判断する。必要があれば競技委員長、大会委員長と協議し、適切な競技運営の責任を負」い、「得点、罰則の記録ミスが試合中に判明した場合は、その時点から正しい状況で再開する。試合後終了後（原文ママ）に記録ミスが判明した場合は、勝敗に関する場合は相応しい状況から再試合をしなければならない。

平成26年度の選抜大会のように、試合終了後であっても得点記録が不適切であり、修正した結果同点であった場合は、延長戦を行わなければならない」と明確に規定した。

さらに、「レフェリー・TDの間で通信機器の使用を積極的に推進する」ことで、「TDは、レフェリーが見ることのできなかった失格相当の違反を助言することができる。上記の事案でも通信機器を利用することで、レフェリーとTDの間で情報交換、確認が行えることから、ミスを未然に防ぐことができる」とした。

今回の試合では、問題のシュートシーンでレフェリーは明らかにラインクロスの判定を下している。ただ、そのあとすぐに法政二GKがコート中央付近にスローをしたこと、法政二の選手がそこでボールを受けたことでスローオフと勘違いし、TD、スコアラーともに得点誤記の原因になった。

しかし、実際にはその時点で法政二の選手数人が浦添の陣内に入っており、TDと審判の意思疎通がより円滑に行なわれていれば、このミスも防ぐことができた可能性がある。

いずれにせよ、日本協会には、こうした通達を出したからそれで終わりということではなく、周知徹底を求めたい。粛々と、では徹底しきれないのは今回の件でも明らかだ。

異議申し立ての基準作りを

このように事実判定を除いた異議申し立てによって、明らかなミスへの対応が義務付けられたことは大きな前進となるだろうが、今後、もう1つ問題になる可能性があるのが、「異議申し立て」の方法だ。

今回の通達などでは、「異議申し立て」の方法や、それをどこまで受け入れるのか、といったことには触れられていない。それを明確に規定しなければ、全国大会に限らず、地方大会などでも、こうした申し立てが頻繁に起こるかもしれない。

ビデオ映像の持ち込みに関しても、今は情報技術の発達も進み、公式でないビデオであれば、その内容を改ざんするといったこともできるかもしれない。

例えばノルウェーでは、中高生年代の大会であっても国際ルールを参考にした異議申立て方法が定められていて、カップ戦（トーナメント形式）の場合、異議申し立てがあれば、試合後15分以内に書面でノルウェー協会の審査委員会に提出しなければならない。その際には手数料が必要だが、異論が認められれば手数料が返却されて、その決定に従うことになる（今回の場合はやり直し）。しかし、却下されれば手数料は戻らず、さらにその後にビデオなどで証明できたとしても、その決定は覆らない、という（協力：内林絵美さん）。

日本とノルウェーでは事情が違うので、必ずしもこうした部分まで国際ルールに則る必要はないだろうが、申し立ては試合終了から何分以内までOKか、書面なのか口頭なのか、ビデオ映像は持ち込んでいいのか、可の場合も大会公式映像のみとするのか、といったあたりは、日本の実情に合わせた基準を作ってしかるべきだろう。

今回、さまざまな判断が後手後手に回り、最後は〝大人の都合〟で決勝が中止という結果に終わってしまった。なにより、自分たちの力で決勝の舞台に立った北陸と浦和学院の選手たちの気持ちを考えると、やりきれない思いは尽きないが、この前代未聞の中止劇を大きな教訓として、各種大会でよりよい運営を行なってもらいたい。

女子のみの表彰式となった今回の高校センバツ。このような事態は二度と引き起こしてはならない

平成26年度全国高等学校ハンドボール選抜大会の競技運営に関してのお詫び

男子第４回戦「県立浦添高等学校 対 法政大学第二高等学校」の試合において、試合終了後、公式記録用紙に誤りがあると当該チームより指摘がありました。着地シュートの判定を得点とした誤りが確認されましたが、該当試合は終了しており、成立したと判断しました。翌日、男女準決勝を行い試合結果により、県立四日市工業高等学校、県立浦添高等学校の３位表彰を行いました。

最終日男子決勝「北陸高等学校 対 浦和学院高等学校」の前半終了時、本来は、引き分けであったことが確認されているために上記準々決勝の延長戦から見直しを図るべきとの日本協会の指示を受け、大会本部の判断として、越石大会副委員長が館内放送により試合の中断を発表しました。

その後、準々決勝の延長戦からの実施を検討しましたが、選手のコンディション、モチベーション、日程等を考慮し、試合の実施は断念しました。

順位決定については、北陸高等学校　浦和学院高等学校を１位。県立四日市工業高等学校　県立浦添高等学校　法政大学第二高等学校を３位としました。

選手、保護者、学校関係者　並びに多くの方々には多大なご迷惑をおかけしました。深くお詫び申し上げます。

（公財）全国高等学校体育連盟ハンドボール専門部
部長　越石信次

※引用している日本協会の文書内容は４月３日時点